

人と人、思いをつなぐ新聞の教育的活用

宋粟市立都多小学校 校長 久保 欽哉
教諭 大前 貴之

1. はじめに

本校は播磨北西部の山間地域にある全校児童 38 人の小規模校である。校区は少子高齢化に加え、過疎化の影響を受け人口が減少してきている。校区内で小学生が居る世帯は校区内全世帯のうち 7% にしかすぎないことからこのことがうかがえる。しかし家庭、地域の学校教育に対する関心は高く、教育活動にも協力的である。児童は幼少期からの顔見知りがほとんどであり、明るく穏やかな学校生活を送っている。

そんな中で本校は 2012、13 年度に 2 年間にわたる N I E 実践校としての指定を受け、新聞を活用した教育活動の実践に取り組んできた。2012 年度は「新聞を活用し、自分の意見を仲間に伝え合うことの楽しさを体験する」、13 年度は「新聞を通し、人と出会い、人とつながろう」をテーマとして、新聞を活用して人と進んで関わり、人間関係を柔軟に広げていく力を育てることを目指した。これらの取り組みで新聞が学校の教育活動の中で優れた力を持ち、幅広い分野で活用可能な教材・資料であることに気づいた。

どの実践においても教師と児童、保護者が結果や形に捉われ過ぎず、自由な発想で新聞を活用することを心掛ければ、参加者全員が楽しみながら発見の喜び、感動、感じたことや考えを伝え合い、人と人とのつながりを深めることに役立つのが分かった。本年度は実践奨励校としての指定を受け、

新聞を教育活動に生かす取り組みを進めた。



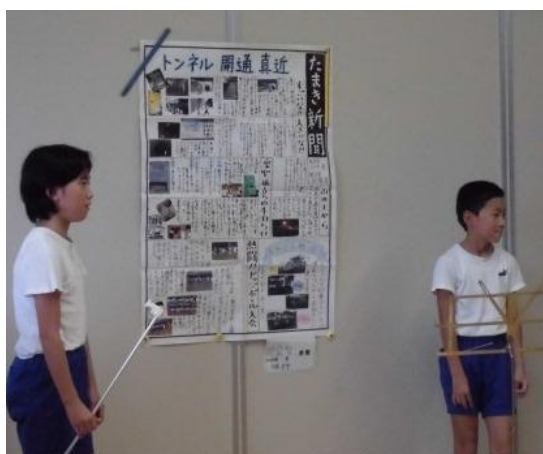
2. 具体的な実践

【N I E 夏休み家族新聞発表会】

本校では以前から夏休みの課題発表の場として自由研究発表会を行ってきた。児童それぞれが自由なテーマで夏休みに挑戦したことや発見したことをまとめ、全校児童に向けて発表するものである。この取り組みを、新聞を通して家族のコミュニケーションを深める機会となるように「夏休み家族新聞コンクール」と、あらためて開催した。

新聞名はもとより、夏休みの出来事、家族の紹介やペット自慢、4コマ漫画やクイズなど記事内容には制約を設けなかったので、オリジナリティーあふれる楽しい新聞が集まった。実践 1 年目の昨年度はどのようにまとめたらよいのか、どんなことを書けばよいのかといったことに保護者の戸惑いも見られたが、昨年度に続いて実施した本年度はさまざまな工夫が凝らされた、いっそう素晴らしい作品がそろった。

家族新聞コンクールは「模造紙に新聞形式でまとめる」「家族みんなで挑戦する」。この2点を約束として設定している。従来の自由研究発表は、模造紙などにまとめたものに口頭での発表を加えて、伝えたいことの全容が伝わる作品が多かったが、新聞形式でのまとめを条件にしたことで、口頭での発表を加えずとも、作品を見る人、つまり読者に伝えたいことがきちんと伝わるようまとめられている作品が増えた。新聞の持つ「読者に広く伝える」性質が「読者に伝える作品作り」に伝わったのだと思う。



また、本年度の特徴として大きなイベントばかりではなく、夏休みの日常生活や家族の動向など身近な所に題材を求める作品が増えたことも挙げられる。昨年度は家族で出掛けたことを扱ったり、夏休みのイベントをまとめたものが多かったが、本年度は地域で進んでいる工事の様子を知らせたり、家族のことをクイズにしたりといった内容が増えた。新聞記事の中には地域の身近な出来事を取り上げたものもある。昨年度、記者派遣で記事を書く時の気持ちや工夫を聞かせていただいたことが、本年度の内容の変化に表れていたのではないだろうか。



題材に身近なものが増えた分、発表に対する児童の質問が増え、聞く方も「もっと知りたい」「尋ねてみたい」という気持ちが強く持っていたことが伝わった。左下の写真は質問をしている様子であるが、多くの児童が熱心に話を聞いていることが分かる。

発表会の当日は、児童が家族と一緒に作った新聞をうれしそうな顔で発表し、新聞に何を書こうか、どんなふうにまとめようかと家族で考えた様子まで想像できるような発表であった。昨年度は優秀作品を表彰するようにしていたが、どの作品も家族の協力という大きな値打ちが付いていたことが分かったので、本年度は作品に優劣をつけることは取りやめた。集まった家族新聞は運動会の当日、体育館に掲示して地域の皆さんにも見ていただいた。

【6年生①：社会科での活用】

6年生の社会科では政治の仕組みを学ぶ単元がある。本年度は12月に衆議院の選挙が行われたため、「選挙って何だろう」という強い興味を持って学習に入ることができた。地域で掲示されているポスター、投票所の様子など自分で見たものに加え、新聞記事を教材として使用した。初めに国会、

内閣、裁判所の仕組みを学び、その後に学校に届けられている新聞各紙を見比べながら、選挙当日に至るまでの政治の進み方などを確かめた。

1紙だけでなくさまざまな新聞の読み比べにより、社説の内容が異なっている事実気づいた児童もいた。初めの段階は、同じ内容を扱っている記事をそれぞれの新聞から切り抜いて整理することから始めた。この活動が出来事を時系列に並べることにつながり、選挙そのものだけでなく、選挙に至るまでの国会の様子や総理大臣の指名などに新聞を通して触れ、学びを深められた。また選挙が実生活につながっており、投票が国民の大切な権利であることや投票率の実態についても学ぶことができた。

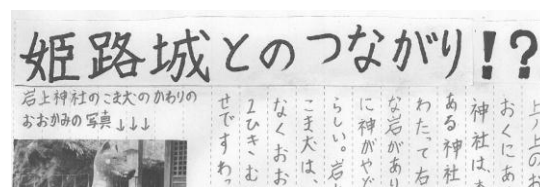
【6年生②：総合的な学習での活用】

本校では総合的な学習の一環として「都多っ子ふるさと学習」に取り組んでいる。これは地域の方の協力を得て、都多という地域を知り、大切にしようとする心情を育むものである。6年生では「歴史発見！都多の里」として地域の歴史を学ぶ学習課題を設定した。この学習の中で学んだ内容をまとめる手段として「歴史新聞」の作成を進めたが、次の点に要点を置いた。

- ① 読者を意識した見出しと文章の書き方
- ② 写真の効果的な活用
- ③ 友達との話し合いによる記事作成

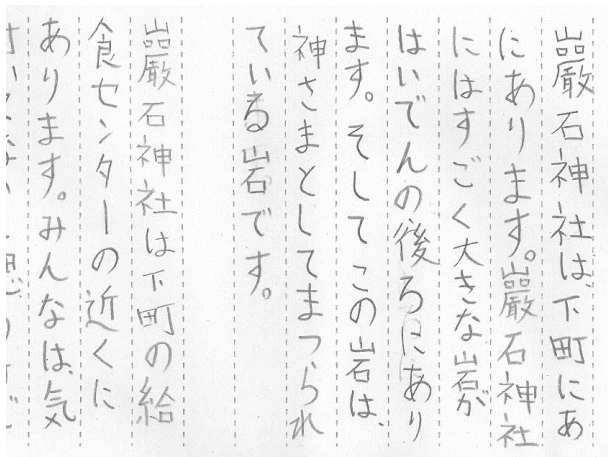
この実践は昨年度も取り組み、効果を上げた。本年度は前年度からの積み上げが大きな違いである。6年生は昨年5年生の段階で「見出しや写真のレイアウトを工夫して自然学校の思い出を新聞にしよう」とい

う学習をしている。そのため見出しの作り方には早い段階から工夫が見られた。

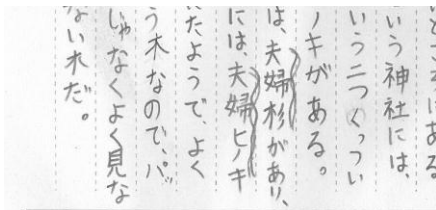


読者の気持ちをあおるだけでなく、きちんと伝えたい内容を表すことも見出しの大切な条件である。短い言葉でこの条件を満たして表すのは難しいが、昨年度、見出し作りの学習をしたことでスムーズに活動を進められた。昨年度の実践では、NIE事務局から講師に来ていただいてプロの技や工夫の仕方、児童への講評を頂いている。その経験が今回の見出し作りの工夫に効果的に繋がっていた。

そしてこの学習では、見出しだけではなく、リード文をうまく使うことも目標の一つとした。短く記事の内容を表し、記事の概略を伝える部分の文章作成である。



上の写真では右側がリード文に当たる部分である。どこにある何を記事として扱っているのかを短くまとめている。左側からは記事の本文が始まっているが、この記事の場合は、その岩がどんな大きさなのか、どうして岩が祭られているのか、自分の感想などを詳しく書き進めている。リード文をまず書くことで自分の伝えたい事柄のベースは何なのか、詳しくしていくべき内容は、どんなことなのかに着目できた。



巖石神社の夫婦ヒノキ
6年生7人分

これは木の幹の大きさを伝えようとする写真である。活動の中で「ただ木を撮影するだけでは自分たちが見ている木の大きさは伝わらない」と考え、みんなで手をつないで一緒に写るとする方法を考えることが

できた。見出し、リード文、写真と5年生で学んだ内容が本年度の新聞作りに有効に生きていた。

3. 成果

本校は3年にわたるN I Eの実践を進めてきた。1年目はN I Eとの出会いの年。教職員も児童も手探りで新聞を活用する方法を探った。そこで得たのは、新聞を楽しむことができれば児童の中に生きるものが生まれる、ということであった。そして2年目は児童の表現力とコミュニケーションの力を高め、人間関係を広げていくことを新聞活用のテーマとした。

この2年間の取り組みを踏まえ、本年度は児童の活動や学習に新聞の良さをどう織り込むかを考えた。限られた授業時間の中で学びの質を高め、児童の表現力の幅を広げること新聞をお手本として扱ってきた。

新聞には「客観的に」「伝える」「広める」という性質がある。これは児童が今後、身に付けるべき表現力にも必要な事柄であり、生活の中にある新聞を手本とすることで、実物を参考にしながら「どうすればもっと伝わるだろう」「どうすれば正しく伝えられるだろう」と課題意識を持って学習を進めることができた。そして活動の目標に即した実践を行うことができた。

新聞は情報メディアの一つとして重要なものである。しかし、そればかりに縛られずコミュニケーション力を高めたり、遊びの中で生かしたりと児童の活動に生かせる場面や可能性を多く持つツールの一つとして活用していく、そんな視点を持って教育活動に臨んでいきたいと考えている。